

之強風雨ニ是又立木迄も吹倒し候次第ニ御座候

慶応の米価急騰

西村善雄家文書 慶応二年「一八六六」八月七日
 当寅年田作之儀、其以来兎角不順^三、中稲・晩稲共益後ニ至
 り候^四、出穂悪敷、如何御座候哉、日夜心配罷在候処、去ル
 七日夜中晝ニ至、暴風雨ニ而村中之田作一円吹荒、何共可^レ
 申様無^二御座^一

善政

昭和初年の土 慶応四年「一八六八」一月
 地の古老の話

慶応四年正月が伏見鳥羽の戦で、ビクビク肝を冷やさねばな
 らなんだ。それに引き続いてこの大水だ。(中略) ちょうど
 四月上旬から大雨が降り続いて、淀川木津川が大いに増水し、
 大池はおよそ一丈八尺余りの増水だ。とうとう五月十二日丑
 の刻(午前二時)宇治橋の下流、いまの桜井の池の堤が二百
 間余りも切れ、さか落しに押寄せてきた。流水は当時宇治橋
 の本にあった橋姫神社を押し流し、槇島村を浸してエンバ堤
 を巨椽大橋の上手で切り、小倉の北では橋本町の定右衛
 門・三四郎・与吉・卯右衛門・万吉・熊右衛門・幸右衛門・
 寛右衛門・茂平治・文七都合十軒が流され、三四郎のお仲婆
 さんはクズ屋の家といっしょに大池へ流され、大声あげてい
 たのを、助け船を出して破風より助け出した。

戊辰の淀

都鄙新聞第四号 慶応四年「一八六八」
 淀城中一円ノ水中ト成リ淀橋流レ落チ所々堤切レモ有^レ之

災害のなから

京都日出新聞 昭和九年「一九三四」九月

暁過ぎから近畿地方を襲うた空の大魔王、猛台風は狂ひに狂
 ひ暴れに暴れ、募る狂暴さは午前八時半に至つて、風速実に
 二十八メートル、京都付近を突いて当地未曾有の烈風となり、
 看板を吹き、電柱を倒し、屋根を剥ぎ、家を飛ばし、倒壊家
 屋は無数、死者、負傷者続出、殊に淳和、西陣、八幡、朱雀
 第七等々小学校の崩壊は、授業開始の間際のこととて幼き者
 の死亡は百に垂んとして、悲惨眼も当てられず。

土砂災害

京外への道

日本紀略 天曆三年「九四九」五月二十二日
 近くは曾て粟田山路俄かに以て頽破し、已に損害をなす、車
 馬の往還甚だ煩い多し、官使を差して実検を加うべきの由、
 宣旨を山城国に給う

橋梁の造営と河川の修理

山槐記 元暦二年「一一八五」七月九日
 午の剋、地震う、五十年已来未だ覚悟せず、(中略) 後に聞く、

地震災害

宇治橋皆以て顛倒す、時に之を渡る人十余人橋に乗り水に入
 る、其の中一人溺死すと云々

市街の周辺地域への拡大

花園天皇宸記 正和六年「一一三二」一月五日
 後に聞く、地震の間、人家或は顛倒すと云々、白河辺り五人
 死者ありと云々、元暦以来此の如き地震未だあらざる歟、近
 代未曾有と云々、正応の関東大地震は数日と云云、其の時尚
 此に如かずと云々

慶長の大震災

義演准后日記 慶長元年「一五九六」閏七月十三日
 伏見の事、御城・御門殿以下大破、或は顛倒、大殿守(天守)
 悉く崩れて倒れたぬ、男女御番衆多死す、いまだその数を知
 らず、其外諸大名の屋形、或は顛倒、或は相残るといへども
 形ばかりなり、其外在家のていらく前代未聞、大山も崩れ大
 路も破裂す、ただごとには非ず

(2)

慶長の大震災

増補家忠日記 慶長元年「一五九六」
 上臈女房七十三人、仲井(居)下女五百余人横死す

慶長の大震災

言経卿記 慶長元年「一五九六」閏七月十三日
 一、寺内ニハ門跡御堂(本願寺)、興門御堂(興正寺)等顛
 倒了、両所ニテ人二、三人死去了、其外寺内家悉大略崩了、
 死人三百人ニ相及了、全キ家一間(軒)モ無^レ之